

日常に潜むオノマトペ

【商品広告】

ファッションの分野でもオノマトペは多用されている。ファッション誌やファッション通販サイトでは、色やサイズを正確に伝えることができても、感触だけは伝えることができない。そこで、触っていないくとも感触を思い起こすことができるオノマトペが多用されているのだ。たとえば「ふんわり」「さらっと」などの表現はよく見かける。通販市場が拡大している今、オノマトペの役割はより重要になっているだろう。

【食レポ】

食感を表すオノマトペは多種多様だ。オノマトペを聞くだけで、その食べ物が容易にイメージできる。たとえば「ほくほく」や「シャキシャキ」。前者はじゃがいもを、後者はレタスを想像した人が多いだろう。食レポでオノマトペが多用される理由は、端的に味や風味を伝えることができるからだ。「ふわとろ」や「もちもち」と聞いたら、あなたは容易かつ鮮明に、その料理の食感を想起できるのではなかろうか。

【漫画の効果音】

漫画の効果音にもオノマトペは多くみられる。音を表現するオノマトペを漫画に用いることによって聴覚的にも漫画を楽しむようになるからだ。たとえば、静かな場面では何も効果音をつけないでおくよりは「シーン」というオノマトペを用いたほうがより場の静けさが読者に伝わりやすくなる。絵だけでは表せないような臨場感が生まれ、読者をその世界に惹きつけるのだ。

【コラム】

漫画に効果音を初めて導入したのは『鉄腕アトム』で知られる手塚治虫先生。もともと存在していた「シーン」という表現を漫画に初めて用いたそう。今の漫画に効果音が不可欠であることを考えれば、手塚先生は本当に偉大だ。

ど ンドン知って
じ じゃんじゃん使おう

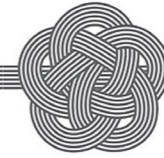
魅惑の言葉

オ マ ペ
ノ ト

オノマトペは2種類に分けられる。1つ目は擬音語である。これは物が発する音や声を表した語句のことで、たとえば「ドカーン」「トントン」「ワンワン」などがある。2つ目は擬態語だ。状態や心情など、音のしないものを音によって表現する言葉である。たとえば「ツンツン」「デレデレ」「ニヤニヤ」などが挙げられる。

オノマトペ。それは日本語の神秘。私たちの生活に欠かせなくなったオノマトペの歴史は『古事記』の時代にまで遡る。その歴史の長さゆえにまだまだ謎が多い。そんなオノマトペの魅力を掘りさげていこう。

日本とオノマトペ



オノマトペは日本特有の表現ではないが、その数は諸外国に比べると多い。諸説あるが、英語のオノマトペ表現の数は日本のおよそ3%にしか満たないというデータもある。なぜ日本ではオノマトペが豊富なのだろうか。

日本にオノマトペが多い理由

1. 日本語は他の言語に比べ、極めて音節が少ない。英語の音節は3万個と言われているが、日本語の音節はアイウエオの50音と濁音・半濁音、「ニャ」など拗音を含め、112個しかない。その音節の少なさを補うために「ドキドキ」や「ザーザー」などの「二音節反復型」オノマトペをコミュニケーションのなかで多用するといわれている。
2. オノマトペは日本をはじめとするアニメ文化圏に多い。アニメ文化では、声を出さないはずの星や花にまで生命を見出す。それによって「キラキラ」や「ヒラヒラ」というオノマトペが生まれるのだ。日本は古くから和歌をはじめとした文学で、動物や自然の音をオノマトペで表現し登場させてきたのである。

日本最古のオノマトペ

日本でのオノマトペの歴史は、奈良時代に書かれた『古事記』にまで遡る。その中でみられる1つの例が、塩をかき回す「こをろこをろ」である。当時は平仮名がなかったため「許袁呂 許袁呂」と表されている。その後、平安時代には平仮名のオノマトペが現れ、鎌倉時代には音を表すオノマトペが増えた。江戸時代になると心理的状态をも表すようになった。オノマトペは形を変えながらも現代まで続いているのである。

オノマトペの変遷

オノマトペの変化の様子は大きく5つのパターンに分けられる。その5パターンを紹介しよう。

1. 元 々は名詞だったものがオノマトペになる事例がある。たとえば「いらいら」は“とげ”を意味する「いら」、「ほのぼの」は“微かな様子”を意味する「ほの」といった名詞であったが、そこからオノマトペの特性を得たとされる。

2. 擬 音語がその音声や感覚を引き継いで擬態語となり、抽象化した意味となる事例がある。たとえば「からから」は上代では高く軽やかに響く音として、中世には明るく爽やかな笑い声を表す擬音語として使われていた。近代になるとのどが湯いた様子を示す擬態語としても使われるようになり、現代では笑い声の表現としてはみられなくなった。

3. オ ノマトペの中心的な意味は変わらずに、その対象が変化してきた事例がある。たとえば「めろめろ」は滑らかに動いている様子を表す。その対象が中世では塗り物の表面がはがれる様子、近世では涙がとめどなく流れる様子、そして現代では人が何かを溺愛しうろたえる様子へと変化してきた。対象がものから人へと変化したのだ。

4. 意 味が限定されるという事例もある。たとえば「うっかり」というオノマトペの中心的な意味は、心ここにあらずの様子である。そこから“何かに心奪われている様子”と“注意が行き届かない様子”の2つを表していた。このうち前者の意味が消滅し、後者の意味としてしか用いられなくなった。

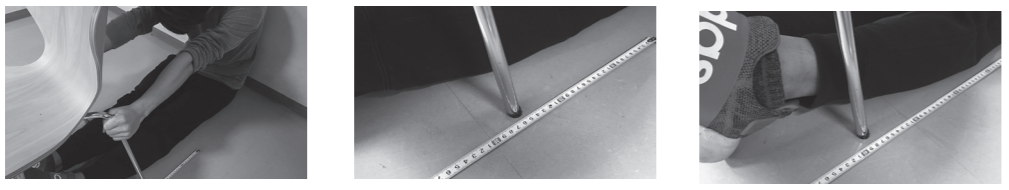
5. 意 味がプラスからマイナス、またはマイナスからプラスになった事例もある。たとえば「のたり」「のろのろ」などは、当初マイナスの意味で使われることはなかったが、次第にマイナスの意味をもつようになっていった。これには、時代の価値観が関わっているとされる。ゆっくりとした雰囲気が好まれる時代であれば、プラスの意味でとられるし、ゆっくりとした雰囲気を良しとしないならば、マイナスの意味でとられるだろう。

オノマトペはコミュニケーションの場面だけで役立つのではない。特定の運動を円滑にし、大きな力を発揮しやすくさせるなど身体に作用することもあるのだ。たとえば「ニャー」と言いながら前屈を行うと、身体が柔らかくなるといわれている。また、オノマトペを用いて行動をイメージすると、やる気を司る脳の線条体にも良い影響を与えることが研究により明らかになっている。これらのオノマトペの特性は、教育やビジネスの場面でもうまく活用することができるだろう。

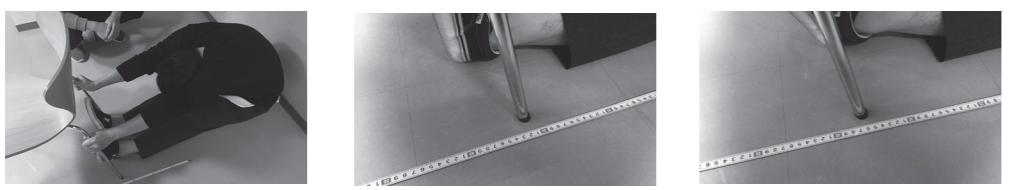
オノマトペの効果

柔軟体操ルポ

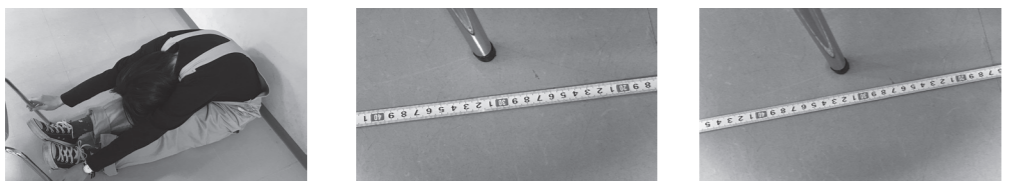
「ニャー」と言いながら柔軟をすると記録が伸びる説を検証するため、当企画員は立ち上がった。それぞれ無言で行った長座体前屈の結果と「ニャー」と言いながら行った結果を比較する。



まずは、企画員F。上の写真を見ていただければわかるように、恐ろしく体が硬い。これでも彼なりに全力で伸ばしているのだ。記録は26cm。さて、これが「ニャー」というだけで本当に記録が伸びてしまうのだろうか、いざ。結果はニャンと驚き38cm。そんなことあるのだろうか。我々は自分の目を疑った。12cmの伸び。恐るべし、ニャーパワー。



続いて挑戦するのは企画員D。彼は外見に見合わずなぜか体がやわらかい。無言で行った記録は32cm。なかなかの記録。ここからどれだけ記録を伸ばせるのだろうか、いざ。ニャー。結果は、36cm。4cmの成長がみられた。



最後に挑戦するのは企画員W。元バレーボール部の意地を見せられるか。無言で行った記録は30cm。まずまず。「ニャー」の効果はいかほどに、いざ。ニャー柔軟の記録は、32cm。伸びは2cm。やはり人によって伸びしろは、まちまちだった。

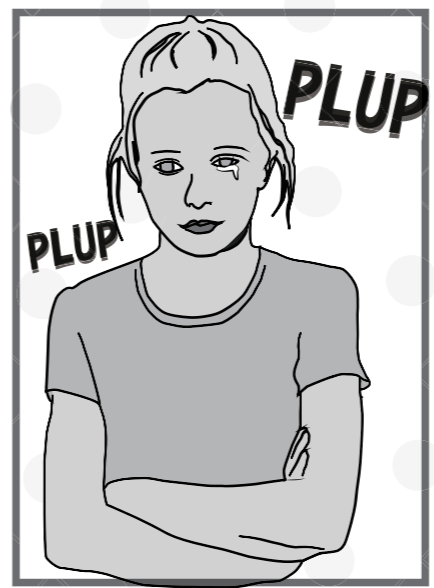
複数回行ったが、伸びがみられない時もあった。私たちの結果では平均6.2cmの伸びがみられた。少なくとも私たちの実験結果によると、「ニャー」というオノマトペを口に出すことによって柔軟性が上がるということがわかった。オノマトペは私たちの能力に何らかの影響をもたらしているのかもしれない……。

英語と日本語のオノマトペ



【日本語と英語のオノマトペ表現の相違】

日本語と英語ではオノマトペの表現方法が異なる。もちろん英語にもarf (ワンワン)、zap (バシッ) などといった英語オノマトペも存在するが、オノマトペ的表現を動詞で表す場合もある。たとえば、日本語では泣く表現をするときに「しくしく」や「わんわん」などの副詞を動詞の前にもってきて様態を具体的に表現する。一方で英語ではweep (しくしく泣く)、wail (わんわん泣く) など動詞にその様態の意味が含まれていることが多いのだ。



オノマトペのちがい

← 英語 → 日本語



表現のちがい

← 英語 → 日本語



オノマトペをつけてみよう！

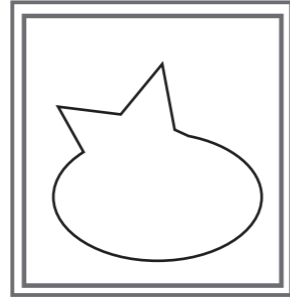
下のワードから選んでつ
くってみよう！2回ずつ使
えるよ！



「マ」



「ニ」



「ム」

マ ニ ム ヌ ネ タ カ キ ク ケ コ

企画員感想

オノマトペという日本語の神秘にふれて、それぞれ企画員が感
じたことを紹介しよう。

オノマトペは抽象的で相手に意味解釈を放り投げている言葉だと思っていた。しかし、この企画を通して思ったのは、抽象的なことは抽象的な言葉でしか伝えられないのではないかということ。何でもかんでも事象を細分化して本質を見失うのではなく、抽象的・多義的であるからこそ伝えられるものもあるのではないだろうか。

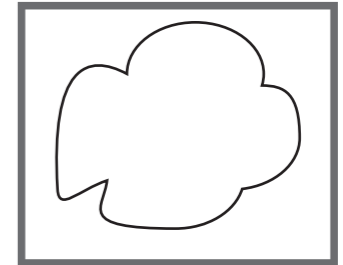
私たちの生活はオノマトペによって豊かになっている。知識を必要とせずとも直観的に相手に伝えることのできる言葉なんて本当に便利で魅力的である。一方で、私たちの生活や深層心理に深く根付きすぎているがゆえにその研究が難航しているのも事実。オノマトペの言葉の仕組みが解明されて、実生活への効用が論理的に証明される日を待ち遠しく思っている。

普段から何気なく使っているオノマトペ。真摯に向き合ったのなんていつ振りだろうか。小学生の頃、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を通して勉強した以来だ。あの頃はオノマトペより、『999』のメーテルに夢中だったが、改めて調べるとその深遠な魅力に感動した。これからはドンドン使用し、生活にワクワクとウキウキを、バンバンもたらしていきたい。

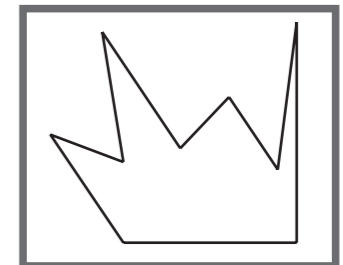
オノマトペと音象徴

音象徴とは

音象徴という言葉を目にしたことはあるだろうか。一言でいえば、音が発するイメージのことである。たとえば、カ行や濁音のついた音はとげとげしたきついイメージがあるとされ、反対にマ行やナ行は優しくやわらかなイメージがあるとされている。実際にウルトラマンの怪獣の名前をみると、「バルタン星人」「ゼットン」「レッドキング」などカ行や濁音のついたものが目立つ。このような、音による文字のイメージを音象徴という。



どちらが「ニヨニヨ」?!



どちらが「キカキカ」?!

何となく分かると思います。
これが音象徴です!!

オノマトペの言葉の成り立ち

私たちは感じたことをオノマトペで表すときに、でたらめに音を選んでいくわけではない。たとえば「も」という音には私たちの日々の経験から、暖かみがあると無意識のうちにイメージ付けられている。「もこもこ」や「もちもち」といったオノマトペからも想像がつくだろう。またある実験によると、母音ではa,uが気持ちいい手触りの時に使われやすく、ieが不快な手触りの時に使われやすいことがわかっている。まだ詳しくは解明されていないが、私たちは何らかのルールに基づいて頭の中にある音と印象のデータベースからその時の感触に最もふさわしい音を瞬時に選択しているのである。そのため、新しいオノマトペに出会っても文字と音のイメージから何となく意味がわかるのだ。